令和6年度　青梅市立今井小学校　自己評価シート(報告書)

自己評価集計

教育目標	1 思いやりのある子 2 自ら学び考える子 3 心身ともに健康な子

目指す子供像	1 たくましさと優しさをもち、誰かのために行動できる子供 2 学習を自ら計画し、振り返り、仲間と共に高め合うことができる子供 3 健康的な生活習慣を獲得するとともに、困ったときに誰かに相談できる子

目指す教師像	1 授業力や専門性を向上させようと意欲あふれる教師 2 子供一人一人に寄り添い、優しさと厳しさを併せもつ教師 3 自身のライフワークバランスを考慮し、やりがいをもって働く教

中・長期目標	1【豊かな心】人権尊重教育の推進。いじめの防止。集団の中での活動を通して他者の気持ちを想像し行動できる子供の育成 2【学力向上】単元を通して子供が身に付ける資質・能力を明らかにした学習展開。ICT活用による個別最適化と協働的な学習の推進。子供が自ら計画して実行する家庭学習。 3【心身の健康】日常的に運動に親しむ態度の育成。教育相談機能の向上と子供がいつでも相談できる環境の整備。より良いメディアとの関わり方を考えることのできる児童の育成 4【家庭・地域との連携・協力】充実した広報活動と開かれた学校づくり。地域・保護者との協働的な学習。「霞川学習」の推進 5【教師の働き方の改革】児童とかかわる時間、授業準備の時間を確保し、教育の質の向上のための働き方改革の推進。

達成度			
	4	ほぼ達成	A	85%以上
	3	おおむね達成	B	70%以上
	2	変化の兆し	C	60%以上
	1	不十分	D	60%未満

項目	重点項目	昨年度までの現状と課題	目標	番号	重点評価項目	達成度 自己	達成度 関係者	最終評価	評価方法	j実践・考察及び次年度への課題と改善策
豊な心の育成	挨拶の励行	児童がすすんで挨拶ができるように指導をした。児童のアンケート結果では、92%の児童が挨拶について肯定的な評価を示している。一方、教職員のアンケートでは「挨拶の指導をしているが、なかなか児童に定着しない」という結果になっている。	取組目標	1A	すすんで挨拶ができるように指導を重ね、児童の主体的な取り組みの計画を立て実践する。職員が率先垂範する。	3.4	4.0	A	教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	児童が場や状況に合わせ、すすんで挨拶ができるように取り組んできた。朝会等で学期に1回は「挨拶」にかかわる話を児童にし、それを基に学級担任も挨拶の大切さを児童に伝えてきた。正門で児童と挨拶を交わしていて、児童が自分から「おはようございます」と言う児童がとても多い。児童アンケートの結果でも、97%の児童が挨拶に関しては肯定的な回答をしている。また、代表委員会が年3回実施したあいさつ運動でも、まだまだ児童同士が元気に笑顔で挨拶をしている様子が見られることができた。さらに、地域の方からも「今井小の子供たちが元気に挨拶を返してくれる。」という声をいただいている。今後も継続してすすんで明るく挨拶ができるように取り組んでいく。
			成果目標	1B	児童が場や状況に合わせ、すすんで挨拶をしている。	3.2				
	いじめの防止	児童のアンケート結果では、学校への取組の評価が99%、自身もいじめに関わっていないという回答が98%と高い数値となった。いじめゼロを目指しながらも、いじめが起きた場合には早期解決ができる組織づくりをすすめていく。	取組目標	2A	重大ないじめの未然防止のため、職員で協力し組織として早期発見・早期対応に努める。全教育活動を通して人権意識を高める。	3.5	3.7		教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	児童が思いやりの気持ちをもち、自他ともに大切にしようとする心情を育ててきた。いじめの防止としては、年間4回のいじめ調査を実施するとともに日頃から教職員が児童と接する中での気付き、保護者からの情報などからいじめの早期発見に努めた。保護者・児童から訴えがあったものに関しては、すべて青梅市教育委員会に報告をした。担任を中心に生活指導主任、管理職で情報を共有し、児童同士で解決できるもの、保護者の協力を得ながら解決を図るもの、全体指導が必要なものなど組織として判断し早期対応をしてきた。ただ、児童の心の中でのわだかまりや負の感情がすべて解消したととは言えない。継続的に見守るとともに、スクールカウンセラーの活用もより進めていく。
			成果目標	2B	児童が思いやりの気持ちをもち、自他共に大切にしようとしている。	3.1				
	非認知的能力を育む特別活動	委員会活動、クラブ活動では、教師主導の活動にならないよう、6年生が中心となって活動をする機会を増やすことができた。児童もたてわり班活動等の異学年交流を楽しみにしているが、短い時間の中でも充実した活動ができるよう、内容を精選していく。	取組目標	3A	委員会、クラブ活動、なかよし班活動等において、児童が主体となって運営する活動を計画し支援する。	3.4	3.7		教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	「なかよし班活動」で一緒に活動をしたり、学校行事の中で異学年の取組を見たりする中で、自身の役割を自覚したり、高学年へのあこがれをもったりすることができるように取り組んできた。その中で、活動に対する自分自身の目標やめあてを設定し、終了後に振り返るという活動を重視してきた。91%の児童が行事や活動を通して成長を実感しているというアンケート結果だった。クラブ活動や委員会活動も児童が主体となって活動する場面ば増えてきた。どのようなことが自分たちでできるのかという経験を今後も積み重ねていく。
			成果目標	3B	児童が特別活動で自分の役割を意識したり、仲良く活動したりしている。	3.2				
学力向上	資質・能力を確実に身に付ける学習	児童の学習成果が評価規準に達するよう、さらなる授業の改善が求められる。学ぶことが楽しいと感じている児童が多いことを生かし、基礎・基本的な学習内容を定着させる取組を、研究部を中心に進めていく。	取組目標	4A	単元を通して身に付ける子供の資質・能力を明らかにして、週案に記載するなど意図的・計画的に指導と評価の一体化を図る。	3.2	3.5	B	教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	学校としての取組である「アフタースクール」や青梅市としての取組である「ステップアップクラス」を実施し、基礎・基本の定着を図った。また、算数では3年生以上で習熟度別指導を行い、定着に時間のかかる児童にも丁寧に指導をしてきた。さらに、今年度は、「音読」と「計算」に力を入れ、国語の授業や家庭学習でも「音読」に取り組み、児童の読む力を育てたり、「めざせ計算マスター」という取り組みを行い計算力の向上を図ったりしてきた。児童アンケートでも、85%の児童が自身の学力の向上を肯定的にとらえている。一方、教職員は53%が変化の兆しはあるが不十分な部分があるとしている。中学校での学びへの接続を意識し、必要な学習内容の定着のための取組を推進していく。
			成果目標	4B	8割以上の子供が、評価規準に達し、単元の形成的評価において平均85%達成している。	2.4				
	ＩＣＴの活用	全学年デジタルドリルを導入し、活用している。今年度は、さらなる「伝え合う活動」「振り返り活動」の充実に向け、新しいICTコンテンツを導入する。年度当初にICTの研修を教員に行い、各学級でのICTの活用量に差が出ないようにしていく。	取組目標	5A	ICTを活用した「伝え合う活動」「振り返り活動」を重視した授業改善に努め、主体的に学習に臨む態度を育てる。	2.8	3.3		教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	ICT機器を学習用具として使い、学習したことを整理したり深めたりすることができるように取り組んできた。教職員は日常的に一人1台の端末を活用した学習活動を行っている。児童アンケートでも95%の児童が活用に対して肯定的な回答をしている。しかし、学級によっての活用状況の差は見られる。来年度は、青梅市が全小学校にデジタルドリルと学習用アプリケーションを導入する予定である。今後は、どの学級でも効果的な活用ができるようにしていく。
			成果目標	5B	週に3回以上はICT機器を学習用具として使い、自身の学習を整理したり、深めたりしている。	2.9				
	家庭学習の習慣化	昨年度のアンケート結果から、家庭学習に取り組んでいると回答している児童は75%という低い結果であった。自ら内容を選び、計画して取り組む自主学習を推奨してきた。今年度は、各学年ごとに取り組む目標の立て方を明示し、改善を図る。	取組目標	6A	家庭学習頑張り週間、家庭学習の手引きの活用を促す等家庭学習の時間を確保できるように児童や家庭に啓発する。長期休業中などにICTを活用し家庭学習との連携を図る。	2.9	3.3		教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	すべての児童が家庭で学習する時間を確保するように取り組んできた。学期はじめに「家庭学習がんばり週間」を設定し、習慣化できるようにしてきた。今年度は昨年度より引き続き「自ら学ぶ」家庭学習への意識改革をめざして取り組んできた。興味・関心に基づいた学習だけでなく、目標をもって計画的に今自分に必要な学習ができる児童はまだまだ多くはない。高学年での自分で計画して取り組む家庭学習の習慣は、中学校での学習に直結していくため、児童が自分で計画し自ら学ぶことのできるよう家庭学習の充実を図っていく。
			成果目標	6B	児童の家庭学習の取り組みが100%となり、家庭学習が習慣化している。児童が自己の課題をつかみ、その解決のために主体的に家庭学習に取り組んでいる。	2.4				

健康な身体	体育的活動の充実	昨年度は、運動の機会を増やし、児童の体力向上に努めてきた。今年度は、児童が発案する運動集会も始まるので、主体的に児童自らが自身の体力に課題をもち、それを克服しようとする態度を育成していく。	取組目標	7A	体力向上のために体育の授業を工夫し、休み時間や放課後に運動に親しむ児童の育成を図る。	3.1	3.7	B	教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	児童が自分の体力を向上させようと、運動に親しみ、外遊びをして体を動かす習慣が身に付くように取り組んできた。「なわとび週間」では、全校の児童が校庭でなわとびに取り組み、なわとび週間が終わっても、練習する姿が見られた。「マラソン週間」も実施した。ここでも、自ら目標をもちそれに向かって意欲的に取り組む姿が見られた。体力調査の結果としては、持久力や俊敏性、投げる力が、全国平均よりも低い傾向がある。日常的な活動の中で向上を図っていく。体育の学習では、授業の工夫を通して体育があまり得意でなく好きではない児童も楽しみながら学習に取り組むことができている。
			成果目標	7B	体力テストで、都の平均値をほぼ達成できている。または、休み時間に外遊びをする児童が増えている。	2.4				
	生活習慣の見直し	今井小の児童はテレビやYouTubeの視聴時間、ゲームで遊ぶ時間が他校と比較して長いことがアンケートから分かっている。これからも安全で健全的な児童とメディアとの付き合い方を学校から家庭に継続して啓発していく。	取組目標	8A	健康的な生活習慣の確立を目指した指導を行う。SNS東京ノート等を活用するとともに、メディアとの付き合い方を意識させる。	2.6	3.3		教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	全国学力・学習状況調査での児童質問紙の回答から、TVやゲーム、スマホなどの使用時間が全国や都の平均と比べて長い傾向がある。このことは、睡眠時間や学習時間が短くなったり、家庭内でのコミュニケーションが不足気味になったりという弊害が生まれる。児童は、自分をコントロールする力がまだまだ未熟なため、児童がコントロールできないときは大人が適切にコントロールすることが必要である。また、SNS等のトラブルが起きている。今井小では、児童がSNSを利用することは原則禁止としている。特に保護者が確認できない状況での子供同士のつながりの中で大きな問題が起こる傾向がある。SNSルールに関してより指導の充実が必要である。
			成果目標	8B	今井小SNSルールや家庭での約束を意識した生活ができている。デジタルメディア等を使用する時間を減らすことを意識している。	2.4				
地域・家庭との連携	学校広報の充実	保護者会の在り方を見直し、多くの保護者に保護者会に参加するよう努めてきた。教職員からは、保護者にもっと学校教育に関心をもってほしいと願う声が強い。学校と保護者が協力関係を築きで児童の健やかな成長につなげられるように改善していく。	取組目標	9A	面談、HP、学校公開、保護者会等で児童の様子を積極的に伝える。	3.4	3.8	B	教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	「道徳授業地区公開講座」、「運動会」、「造形作品展」では実際に児童の活動の様子を見ていただく機会を設けることができた。「霞川学習」を複数の学年で計画して行うことができた。3年生では霞川の「水生生物」の観察を行い、4年生では「霞川地下調節池」の見学による防災教育と「野鳥観察」、5年生では、霞川流域の農業体験として「田植え・稲刈り」を実施した。どちらも地域の方、保護者の方に多大なるご協力をいただいた。PTAのサポーター制度を活用して活動のサポートをしていただき、今井小の特色ある教育に参加していただいた。
			成果目標	9B	学校の情報が適切に伝わり、保護者が教育活動に関心を寄せ、学校と協働している。	2.8				
教師の働き方の改革	児童とかかわる時間の創造	教職員の平均定時外勤務時間が30時間を下回り、働き方改革への取組に向けた成果が出ている。更なる改善を図り教師と子供たちがかかわる時間と授業準備の時間を生み出すことができるようにする。	取組目標	10A	会議の効率化、ペーパーレス化、伝達事項のオンライン化を推進し、児童とかかわる時間と授業準備の時間を生み出すように努める。	3.3	3.2	B	教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	教師が児童と元気に明るく接し、充実した教育活動を行うためには、教師の心身の健康が第一と考える。教師の時間的余裕や心理的余裕を確保し、より児童と関わり、児童を理解し、児童に寄り添うことができるように可能な範囲での改革を進めてきた。働き方改革は永遠に道半ばと考え、より教育の質の向上を目指していく。
			成果目標	10B	児童の教師とかかわる時間が増え、共に活動したり、相談に乗ったりしている。	3.2				